

2023年3月1日

2022年度聖路加国際大学大学院看護学研究科
課題研究

脳血管障害者の日常生活行動「食べる」に関する経験と意思の探求
：文献レビュー

An Exploration of the Experiences and Thoughts of People with
Cerebrovascular Disorders Regarding "Eating", A Daily Living Behavior :
Literature Review

21MN008

小笠原 倅

要旨

【目的】

文献レビューを通して脳血管障害者の日常生活行動「食べる」に関する経験と思いを明らかにする。また、レビュー結果をもとにニューロサイエンス看護高度実践看護師としての看護ケアへの示唆を得る。

【方法】

学術論文、図書、ウェブログ（ブログ）をもとに文献検討を行った。対象文献は学術論文 11 文献、対象図書 15 文献、対象ブログ 36 ブログであった。対象文献から、脳血管障害者本人が日常生活行動「食べる」に関して経験したこととその思いが書かれている箇所を身体、心理、社会・文化的側面からデータ抽出し時期ごとにカテゴリー化を行った。カテゴリーは時期を超えて共通して現れる経験と思いを大カテゴリーとして表現した。さらに経験と思いの大カテゴリーを図として表現した。

【結果】

抽出データは発症直後から 10 年を 10 期に分類することが出来、10 期を大カテゴリーで表現した。脳血管障害者の日常生活行動「食べる」の経験は、9 大カテゴリー【身体的後遺症により「食べる」を阻害される】、【他者から「食べる」ための援助を受ける】、【経腸栄養法が実施される】、【嚥下調整食や嚥下訓練が開始される】、【「食べる」ために対処する】、【社会からの孤立と再参加】、【少しずつ「食べる」を取り戻す】、【医療者による「食べる」に関するサポート不足】、【時間が経ってから「食べる」障害が出る】であった。思いの大カテゴリーは 8 つ認められ、【「食べる」に関する身体的苦痛】、【「食べる」に関する心理的苦痛】、【「食べる」に関する社会・文化的苦痛】、【「食べる」ことを諦めない】、【再び「食べる」ことができる喜びと感謝】、【「食べる」は当たり前ではない】、【「食べる」が回復の指標となる】、【医療者や「食べる」サポートの不足に対する不満、困り】であった。

【考察および結論】

脳血管障害者の日常生活行動「食べる」の経験は、摂食嚥下障害に留まらず、多様な障害を経験することが明らかとなった。また「食べる」に関する思いは、この多様な障害に伴った身体、心理、社会・文化的苦痛が生じており、発症直後から数年に至るまでの全時期に存在していた。片麻痺や高次脳機能障害などのデータから抽出された大カテゴリーは、脳血管障害者の特徴的な障害と苦痛であると考えた。特徴的な障害とそれに伴う苦痛をニューロサイエンス看護に携わる看護師が理解することで、対象者の「食べる」を理解し、専門的視野に立って看護できると考える。加えて、「食べる」を支援することは、食事摂取量を増加させ、口から食べることを復活させるという単なる機能回復ではなく、人の尊厳や QOL の維持・向上に繋がる重要な看護ケアである。これらはニューロサイエンス看護として重要な支援内容であると考えた。今後の課題は対象者の生の声をインタビュー調査し、本研究のデータの信頼性を高めることである。